

# 幼稚園教育要領

## 第1章 総則

### 第3 教育課程の役割と編成等

#### 5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

- 育成を目指す資質・能力について幼児期の教育から高等学校教育までを通じて系統的に示されている
- 幼稚園教育において育まれてきた資質・能力は、小学校以降の生活や学習の基盤
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿
  - 具体的な姿を伝えることで、幼児の育ちが理解されやすい
  - 小学校においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすることとされている。

## 事例を通して考えてみる ～幼児と児童の交流～

5歳児と小学校1年生の交流（七夕製作）。交流活動では、幼児児童それぞれにねらいを設定するとともに、共通のねらいを設定。交流活動は2学級に分かれて別日程で実施し、事前の話し合い→準備→交流活動→振り返りを行った。最初の交流活動では、児童が一人一人の幼児に寄り添い丁寧に教えながら七夕飾りを製作している様子が見られ、幼児も落ち着いて活動できていた。

## 事例を通して考えてみる ～幼児と児童の交流①～

5歳児と小学校1年生の交流（七夕製作）。交流活動では、幼児児童それぞれにねらいを設定するとともに、共通のねらいを設定。交流活動は2学級に分かれて別日程で実施し、事前の話し合い→準備→交流活動→振り返りを行った。最初の交流活動では、児童が一人一人の幼児に寄り添い丁寧に教えながら七夕飾りを製作している様子が見られ、幼児も落ち着いて活動できていた。

最初の交流活動を幼稚園と小学校の教師と一緒に振り返ってみると

- ・楽しく活動をしており、ねらいもおおむね達成できていた
- ・小学校の先生の指示がとても的確でスムーズな交流活動ができた

しかし、次第に「自分でできることをやってもらっている幼児にとって交流の中での学びは何か」といった意見もでてきたので、幼児・児童それぞれにおける学びについて意見交換を行った。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして活用した。活動を通して、主として次のような姿が見られたとの意見がでた。

- ・いろいろな人と親しみをもって関わる姿や、どのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）
- ・自己紹介をする、相手に作り方を教える、願い事を伝える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）
- ・4つの種類の製作を時間内で作るという課題に対して、見通しをもつ力（健康な心と体）

話し合ううちに、幼稚園の教師からは次のような意見があった。

- ・指示により安心して活動できるが、幼児が考える余地があれば、違う立場の人との関わり方を考える姿（社会生活との関わり）、時間の使い方やどの製作をするか等見通しをもって行動する姿（健康な心と体）がみられるのではないかと
- ・幼稚園では幼児同士が助け合ったりしているが、交流会では全員がお世話される側の印象。幼児が能動的に行動する姿や児童と一緒に目的に向かって取り組む姿があまり見られなかった(自立心、協同性)
- ・願い事の短冊は書けないところのみ手伝ってもらう方がいいのではないかと(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)

小学校の教師からは次のような意見があった。

- ・製作が得意であったり、リーダーシップをとれたりする幼児がいることがわかった
- ・同学年の中ではなかなか力を出せないが、今日は自信をもって活動できていた(自立心)
- ・年下の子に何かしてあげたいという気持ちからがんばろうとする姿も見られた(社会生活との関わり)

## 事例を通して考えてみる ～幼児と児童の交流②～

さらに、教師の子供への関わり方についても話し合いが及んだ。

小学校の教師からは次のような意見があった。

- ・ 幼稚園の教師は、認めたり、共感したりと子供たちにその場で直接的な関わりをすることが多いように思った。児童には自分なりに考えさせ、結果を自分で受け止めさせたい

幼稚園の教師からは次のような意見があった。

- ・ 幼稚園では、認めて伸ばす、共感するということが大切にしている
- ・ 幼児は遊んでいるそのときに楽しさや満足感を味わえないと次回へと気持ちが続かないので早めに援助しやすいかも

そして、子供たちの発達を踏まえた対応の違い等に戸惑ったとの意見があった。次回の交流活動では互いの指導をよく見合い、互いの教育についてもっと理解し合う必要があること、子供たち同士の交流を大事にするため、子供たちがつくり上げようとする世界をもっと大切を確認し合った。また、教師は1年生に「～してください」などの指示を控え、4種類全ての製作を目指すのではなく、何をどれだけ作るかも子供たちに考えさせた。

次の交流活動を幼稚園と小学校の教師が一緒に振り返る中で、次のような意見があった。

- ・ 前回同様、児童や幼児が交流活動を通していろいろな人と親しみをもって関わる姿やどのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）、相手に作り方を教える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）、見通しをもって活動する姿（健康な心と体）などが見られた
- ・ 子供たち自身でグループ内の関係づくりができるようにし、活動も各グループに任せることにした結果、「『皆で』とか『私たち』という言葉が聞かれ、一つのめあてにむかって、児童も幼児も一緒になって取り組む姿が見られた(協同性)。そのことによって、達成感も見られた(自立心)
- ・ 輪飾りの数を数えたり、長さを測ったりする活動にも広がったり、幼児にとっては文字を書く機会もできた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

- ・ 交流活動の振り返りの積み重ねが子供たちに対してより意味のある活動になるかどうかのポイント
- ・ 幼稚園の教師は、「この交流会の中で、子供たちに楽しさや満足感を味わってほしい、そして楽しく活動する中で学んでほしい」と考えて認める声掛けや共感する声掛けをする。小学校の教師は、「交流会という授業の中で、児童自身が自分なりに課題に対して考えて行動し、結果を自分たちなりに受け止め振り返ることが大切」と捉え、子供たちの達成度を客観的に理解しようとしている
- ・ 幼児と児童の交流は、双方の子供たちの育ちの上で有意義であるだけでなく、双方の教師にとっても同じ場面の子供の育ちの姿を話題にしていくことで、それぞれの学校種の指導方法や教育観などを理解する良い機会となっている

## 事例を通して考えてみる ～スタートカリキュラム～

幼児期から児童期にかけて、自分との関わりを通して、総合的に学ぶ子供の発達の特徴を踏まえ、次の2つの視点から、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を図り、下記のスタートカリキュラムを考えた。

- ・生活科「学校探検・校庭探検」を中心に他教科のねらいを考えて、合科的・関連的に単元を構成する。
- ・直接体験を通して、生活上必要な技能等を身に付けられるようにする。

## 事例を通して考えてみる ～スタートカリキュラム～

幼児期から児童期にかけて、自分との関わりを通して、総合的に学ぶ子供の発達の特性を踏まえ、次の2つの視点から、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を図り、下記のスタートカリキュラムを考えた。

- ・生活科「学校探検・校庭探検」を中心に他教科のねらいを考えて、合科的・関連的に単元を構成する。
- ・直接体験を通して、生活上必要な技能等を身に付けられるようにする。

### ○円滑な接続のための話し合い ～スタートカリキュラム編成の基本姿勢～

保育参観を行った後に、幼稚園と小学校の教師が意見交換を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、子供の成長の姿や幼稚園の教師の働き掛けの意図について共有し、入学してくる子供の様子を捉え、スタートカリキュラムのねらいを設定した。

#### 意見交換した内容の例

- ・保育参観では園庭の木の実で色水遊びをする幼児の姿が見られた。「ジュースができたよ」とコップに入れた色水を嬉しそうに持ってきた幼児に対し、教師は「すてき、いいね」と幼児の気持ちに共感するだけでなく、「こんな色が出たのね」「〇くんが、発見したの?」「先生も作ってみようかな」など、幼児が新しい発見や色の不思議さに気付くようにしたり、色水の材料や作り方にも目が向くようにしたりする意図が教師の声掛けにあったことを説明した。
- ・幼稚園での生活の様子や幼児が親しんでいる活動（例：何度も読み聞かせのリクエストがある絵本、幼児の好きな手遊び歌）についても紹介した。
- ・幼稚園では登園したら主体的に自分のしたい製作などの活動に取り組んでいる生活や、そのための環境の構成として低いテーブルや幼児が自由に使うことができる道具や材料が用意されていること、教師がいなくても幼児同士で教え合いながら作ったり遊んだりする育ちの姿があることを小学校の教師に伝えた。

### ○週案の作成 ～スタートカリキュラム第2週の週案「はじめまして学校—自分でできるようになるまで—」を作成～

- ・入学した1年生が学校の様子を知り、自分の力で楽しく意欲的に学校生活を送ることができる姿を期待して計画を作成
- ・生活科「学校探検・校庭探検」を中心として他教科のねらいを踏まえた、合科的・関連的に単元を構成したスタートカリキュラムを、具体的に実践できるように計画
- ・この時期の児童の発達の特性を踏まえ、園での生活や親しんでいる活動も取り入れる配慮や工夫

#### 【週案を作成する際に意識して取り入れたこと】

- ・朝の時間の「なかよしタイム」では幼稚園で親しんだ手遊び歌、読み聞かせ
- ・好きな材料で自由に絵をかいたり、製作ができる低いテーブル
- ・複数の教科を組み合わせる合科的・関連的な指導
- ・新しい友達と交流ができる学習活動（グループ活動、名刺交換）
- ・ゆったりとした時間の中で学習活動が進められる2時間続きの学習活動
- ・10～15分程度の短い時間を弾力的に活用した時間割（モジュール）

## 事例を通して考えてみる ～生活科 アサガオ栽培～

児童たちがこれまでの経験を想起しながら安心して意欲的に活動できるようにし、1年生の学習をゼロからのスタートとはせずに、栽培した経験のあるアサガオやそれを使った遊びについて、同じことの繰り返しではなく学びの質を高めていくように工夫



## 事例を通して考えてみる ～生活科 アサガオ栽培～

児童たちがこれまでの経験を想起しながら安心して意欲的に活動できるようにし、1年生の学習をゼロからのスタートとはせず、栽培した経験のあるアサガオやそれを使った遊びについて、同じことの繰り返しではなく学びの質を上げていくように工夫

### 例えば

- ・単元を構想するに当たり、通っていた幼稚園等や家庭から、植物の栽培やそれを生かした遊び、製作などに関する情報を収集し、幼児期の経験や学びを栽培活動につなげられるよう工夫した。
- ・幼児期では、思い思いの遊びを通して学んできた児童たちが、学校においては、学習対象と主体的に関わりながら活動できるよう工夫した。
- ・児童の育ちを把握した上で単元を構想することで、多くの児童の興味や関心が高まるような導入にしたいと考え、単元の導入場面では、一人一人の思いや願いを基に、学級全体の実現したい思いや願いにつなげていく計画し、学習計画を児童たちと一緒に立てることで、一人一人が単元全体の見通しをもって学習を進められるようにした。なお、このように伝え合い交流する場を単元において意図的・意識的に設定することで、各児童の気付きの質を高めることにもつなげていこうと考えた。
- ・児童の育ちや学びはつながっていることを踏まえ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考に児童の経験をうまく引き出し、学びの質を上げていけるよう意識した。
- ・この単元では、一人一鉢、自分のアサガオを栽培することを基本。学習の環境が重要であることも踏まえ、例えば、それぞれのアサガオの鉢は、日常的に関われるよう児童の動線を踏まえ1年生の玄関や教室の前に置いたり、遊びや製作の際には、材料や道具の種類や量、配置に配慮したりした。また、入学間もない時期であることから、特に一人一人の取組の違いに十分配慮することも大切にした。これらの学習環境については、「環境を通して行う教育」を基本とする幼稚園教育を参考にするようにした。
- ・体験に応じて表現しやすいように観察カードを工夫したり、生活科の時間以外にも、朝の会や帰りの会を活用し、児童同士でいつでも情報交換できる機会をつくったりした。観察の際には、見るだけでなく、聞いて・嗅いで・触れて…諸感覚を働かせることを促し、たとえば、比べたり、見付けたりなど、観点を提示することも意識した。
- ・観察で気付いた事実にとどまらず、自分の気持ちと結び付けて表現できることも大切。これらの単元を通じた言語活動や、振り返りの過程での活動を通して、アサガオの世話をして生長を見守った自分自身の成長や自信につなげたいと考えた。

# 幼稚園教育要領

## 第1章 総則

### 第1 幼稚園教育の基本

(略)

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、**教材を工夫し**、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

- 幼稚園教育では、幼児が関わる全てのものが、教材としての価値をもつものとなる可能性
- 教材研究は、幼児の周りにある様々なものの教育的価値を見いだし、整理し、実際の指導場面で必要に応じて構成したり活用したりできるようにするための準備
- 幼児の遊びは、教材との関わりが深まっていくことで充実していくことから、教師はあらかじめ教材のもつ特質や特性をよく理解し、幼児の遊び方や関わり方に即して予測をもつとともに、幼児の活動をどう広げ深めていくのか等、教材のもつ可能性を広く捉えることが大切

# 指導計画の作成と 保育の展開について（仮称）

文部科学省初等中等教育局  
幼児教育調査官 小久保 篤子

